

問4

(作成されていない場合は、科目選択のための情報提供はどのような方法で行っていますか。)

- ・授業概要を作成して学生に配付している。
- ・講義要項を配付。
- ・平成7年度までは、「講義概要」の刊行および年度当初のガイダンスを実施。
- ・「講義要目」による。
- ・「講義題目」を作成配付している。
- ・講義要綱を毎年作成し配付している。
- ・講義概要による。
- ・履修要項に授業科目の内容を明記。
- ・履修案内の中に「講義の概要」として簡単に授業内容を掲載している。
- ・履修要覧に講義要目を掲載している。
- ・講義要項で学生に周知している。
- ・授業要覧(講義要項)及びガイダンス。
- ・授業要覧により情報提供。
- ・学部要覧において簡単な授業の概要を説明している。
- ・「履修便覧」「講義概要」「授業時間割表」を作成し学生に配付している。
- ・履修要覧に講義科目の概要を掲載するとともに、各自の科目選択にあたっては学生の研究指導題目に応じて指導教官が指導にあたっている。
- ・大学院事務室、専任教官および主指導教官が情報提供を行っている。

- ・ 学生便覧(講義題目)による。
- ・ 学生便覧の中に授業科目及び担当教官という項目を設け周知。
- ・ 学生便覧一講義・演習概要。
- ・ 学生便覧・総合科学部概要を配付。
- ・ 学生便覧による。
- ・ 「講義題目表」を配付し当該授業科目の講義内容等科目選択に当たっての情報提供を行っている。
- ・ 「履修の手引き及び専門科目講義概要」を作成し全科目の履修方法、担当教員、単位数、開講期、対象学年及び講義概要等を記載して学生に配付している。
- ・ 人文学部講義題目及び講義内容の作成、配付、オリエンテーション等。
- ・ 授業科目名、担当教官名及び授業科目の内容について記載した「研究科案内」を配付している。
- ・ 各科目の内容の概要、各授業時間ごとの授業内容・担当教官を記載した冊子を学生に配付しています(本学部の専門科目は全て必修です)。
- ・ 専門科目が全て必修であるので科目選択はないが、講義概要等の冊子により情報提供している。
- ・ 授業の概要を記載した授業要項を作成している。本学部の授業科目は、ほとんどが必修科目である。
- ・ 全専門教育授業科目は必修である。
- ・ 医学部専門科目についてはすべて必修のため時間割(冊子)の中に教育目標として記載している。
- ・ 該当年度に開講される科目のみ、要項を作成している。
- ・ 全学共通科目：修案内に各授業科目の内容概略を掲載している。
学 部 科 目：学部便覧に各授業科目の内容概略を掲載している。

- ・「開講科目要覧」(小冊子)を発行し全学生に配付している。
- ・毎年度講義要覧を作成し、学部学生全員に配付している。当該年度に開講予定の授業科目は全て科目紹介として掲載している。
- ・開設科目一覧に「授業概要」を掲載している。
- ・平成7年までは毎年「専門課程教育要綱」を作成しており授業科目内容等の情報を提供していました。
- ・「授業科目内容」という冊子を作成している。
- ・「教科の手引き」(便覧)を配布して行っている。
- ・従来からある授業担当表に授業内容を含めている。
- ・1回生については、入学後、新入生対象のガイダンスで、2回生以上の学生については、毎年、学科・専攻別ガイダンスにおいて履修指導を行っている。
また、全学共通科目のシラバスのほか、全学共通科目、学部専門科目の講義概要等を記載した「開講科目概要」を作成し、配布している。
- ・全体的にはガイダンス等で説明しているし、個別に質問があれば事務で説明している。
- ・4月にガイダンスを行い周知している。
- ・ガイダンスを行っている。また便覧には授業内容が記されている。
- ・研究科紹介パンフレット、ガイダンス等による。
- ・各指導教官により直接学生にゼミナールの内容について情報提供している。
- ・入学時におけるガイダンス及び専任教官をはじめ、指導教官から、直接情報提供を行っている。
- ・学生募集要項に主指導教官候補者の教育研究分野及び各講座の概要等を掲載しており学生は入学前に指導教官(講座)を選択することになる。(科目は存在しない)
- ・授業担当教官が学生と個別に面談しより詳しい情報提供を行っている。

- ・各科目120字程度の内容を記した「授業内容一覧」を配付している。
- ・学生便覧等の授業内容案内と掲示。
- ・開講科目の概要を記載した「教授要目」を毎年講義開始時に全学生へ配付している。
- ・毎年「授業科目概要」および「学習案内」を作成し学生に配布する。「授業科目概要」には、授業科目の担当教官名、授業の概要、使用テキスト等が、「学習案内」には卒業および免許状取得のために必要な履修科目や習得単位数が記載されている。
- ・1、授業の概要 2、教科書、参考文献の指示、3、履修資格等を記載した講義要綱を作成し学生全員に配付している。
- ・入学式終了後の研究科オリエンテーション及び講座オリエンテーションを開催しその際説明等を行っている。
- ・学生便覧の授業要旨による。

教養科目(全学共通科目等)については、教養部履修要項(教養部のしおり)による。

- ・学部:授業科目一覧に各授業の概要、授業計画、教科書、参考書等を記載している。
- ・各年度のはじめに全教官から記入してもらった講義概要を作成して学生に配付する一方、当初の2週間学生に自由に聴講して選択してもらうようにしている。
- ・簡単な履修案内がある他、教官によっては最初の授業時間に個人的に作成してシラバス、参考文献表などを配付している。
- ・年度当初、学生と指導教官チーム(3名)により研究計画、授業履修計画等を打ち合わせる。
- ・大学としては特に行っていないが、各授業担当教官が授業開始時にプリントや口頭で説明している。
- ・学生に配付している研究科履修案内によって、全カリキュラムの内容を知ることができる。
- ・各学生の研究指導委員会で情報提供している。
- ・単位制をとっておらず、科目選択のための情報提供は行っていない。

問5

(5)シラバス作成について (ウ) 作成で最も苦勞された点 (具体的にご教示下さい。)

- ・ 版の選定：学生が持ち運びやすい大きさ、厚さの考慮。
- ・ 退職、転出等により授業担当者が未定になること。
- ・ 2-4年先の授業担当者、内容について記載することについて。
- ・ 定年退官される教官担当シラバスをどうするか。授業科目名のみを残し白紙にしておくか予定的な内容を書き添えておくのか。
- ・ 授業のコマ数及び授業内容の各関連講座との進行の度合いを取るため苦勞した。
- ・ 記載内容の標準化。
- ・ 限られた予算とページ数の制限の中で、より充実した内容とするための工夫。
- ・ 予算が少なくページ数が増せず書式に苦勞した。
- ・ スペースが限られ必要な情報をコンパクトに盛り込む点に苦勞した。
- ・ 限られた紙面にするための様式の統一。
- ・ 一科目一頁にまとめること、文字の大きさを統一すること。
- ・ 開講時間帯、教官の選択、割当等の調整。
- ・ 原稿の収集及び編集、印刷経費の予算措置、非常勤講師担当分の原稿依頼、授業時間割との突合、調整。
- ・ シラバスの作成に対する全学の合意形成。
- ・ 構成員の同意を得ること。
- ・ 全教官の同意を得るのに苦勞しました。
- ・ 非協力的な教官が見受けられた。

- ・ 〆切を守らない教官の存在及び様式を守らない教官の存在。
- ・ 教官の協力不足(原稿の作成、提出の遅れ)。
- ・ 書かない教官が少数ながらいるため サボリと主義主張から。
- ・ シラバス作製のための経費を予め計上していなかったため、その捻出と、捻出した少ない予算以内でいかに良い物(良いと思われる物)を作るか苦労した。
- ・ 講座により授業の方法等が異なるので、記入方法等様式の統一で多少時間を要した。
- ・ 教科、科目によって異なる授業内容であるため、統一した記載項目が作成しづらい。
- ・ 授業担当教官によって内容にバラツキがあり、それを統一したものにすることに苦労した。その他、原稿の様式の周知や原稿の取りまとめ、校正等にも苦労した。
- ・ 学科毎の分冊としているので、各学科のオリジナルティーを認めているが、全体として様式の統一を図っている。
- ・ 全学の教官が担当することを前提としてスタートしたため担当授業コマ数等に差があり不満の調整に苦慮した。
- ・ 授業内容及び担当教官の調整。
- ・ 1回ごとの授業内容を書くことが困難であるとか、不必要とかの主張を抑え、全教官に書いてもらうよう説得に努める必要があったこと。
- ・ 書式の統一、配付対象学生の決定。
- ・ 科目番号と書式を統一する作業 同一科目を複数の学科に別の科目名で開講する場合の扱い方。
- ・ 個々の教官が作成しやすい統一的フォーマットの作成。
- ・ 統一様式についての合意と各教官への徹底。学部としての不足部数を増刷するための経費の捻出。
- ・ 作成上どのような項目を選定するかがかなり難しかったまた、各授業の内容をどの範囲まで、どの程度くわしくシラバスにもりこむかに苦慮した。

- ・記入様式と内容を整えることが難しい。
- ・授業毎の特性を生かしながら全体の統一を図るという点。
- ・特になし、強いて言えば授業概要原稿の集約から印刷完了までの時間的余裕がないこと。
- ・時間割表との付合せ、原稿依頼、整理、校正。
- ・時間割表の作成。
- ・原稿の校正、カリキュラム、授業時間割等との整合性のチェック。
- ・統一フォーマットを決めること(学科により授業科目の違いに基づく見解の差がある)。
- ・様式について統一した様式にしたが授業科目によっては授業計画等で表現しにくい科目もあった。
- ・記載要領を付して、統一した様式によるシラバス作成を依頼したが、初めてのため、印刷原稿がまとまるまでに、予定した以上の期日を要したこと。
- ・作成の是非をめぐっての教官の意思統一と記載項目の検討。
- ・原稿の依頼と回収。
- ・非常勤講師への依頼、回収。
- ・全開講科目の原稿提出に時間を要した。
- ・原稿の集約に関し授業担当教官が未定の場合の措置並びに原稿の校正作業における担当教官の係わり等。
- ・教官から提出された原稿の編集作業。
- ・原稿収集および体裁の統一。
- ・予算の捻出。
- ・事務室内の印刷機、常備の中質用紙を使用のため、今後外注のための予算計上が望まれる。

- ・全員に提出させること、内容を充実したものにする。
- ・様式化した用紙に教官各自がワープロで記載しそれを回収してオフセット印刷により作成しているのも特に大きな苦勞はないが、原稿の回収の時間的問題と、印刷経費の捻出。
- ・全教官の提出を依頼すること。
- ・印刷日程及び経費。
- ・多数の原稿をもれなく収集し取りまとめることの苦勞した。書式の統一について論議があった。
- ・利用する学生の混乱を招かないように、目次の編成内容に苦慮した。教官の協力を得ること。
- ・学生にわかりやすい書式と記入すべき内容の選定。教官の人数が多いので調整が必要。
- ・入学年度ごとに、教育課程、卒業要件、履修要件の違いがあり学生に解りやすい掲載方について苦慮する。
- ・学生に理解させやすい講義要目を作成すること。
- ・卒業までの授業科目の修得方法をいかに簡潔に説明できるか。
- ・学生にとって手軽で利用しやすいこと、学生に対して実施を確約できる授業計画であること等に注意を払った。
- ・学生が系統立てて予習、復習が出来るように配慮した点。学生が重要なポイントをつかみやすいように内容を記述した点。
- ・学生に講義内容を正確かつ詳細に伝達するために講義回数15回にわたり明確な履修ポイントの記述依頼を工学部全教官に徹底したこと。
- ・実際に行う授業内容及び回数との整合性。授業内容の規格化及び内容消化の危惧。
- ・学生への便宜のためにキーワード索引及び教官別担当科目索引を掲載しているが、その作成に時間を要する。

- ・授業科目当たりの「概要」について、字数制限があるため、学生に対して理解しやすい様に心がけた。
- ・新入生に判りやすくするため、親切丁寧にしかも簡潔に文章表現し、この一冊で4年間の授業計画の全てが判るように記載事項の編集に苦勞する。
- ・シラバスに対して必要性を感じない、どうせ学生は見ない、そのために研究が削られるのは困る、教官に対する管理強化、などとする反対意見のある中、たくさんの会議を経て作成合意を得、原稿提出にこぎつけた、作成に至るプロセスそのものが苦勞した点である。
- ・非常勤講師への連絡調整。
- ・非常勤講師の原稿が集まらなかった。
- ・非常勤講師の日程が未定で授業内容等空白の箇所が出る。
- ・専任教官では特にないと思われるが、非常勤講師任用(特に変更ある場合)の際の原稿作成。
- ・全教官に期限までに指定の字数内容の原稿を提出してもらうこと。
- ・専門用語。
- ・シラバスに掲載する内容、項目の決定 ・各授業科目各回ごとの指導内容の記入。編集、校正作業。
- ・授業概要などの記入項目決定、校正、予算。
- ・専任教官以外の教官(兼担、非常勤講師)からの原稿集めに多くの勞を要した。内容的に、性格の著しく異なる科目をどのような形である程度の統一性のあるシラバスにまとめるかが問題であり、なお問題を残している。表記、表示の統一の徹底に勞を要した。
- ・非常勤講師を含めた全教官への原稿執筆依頼書の取りまとめおよび回収後の整理。
- ・各授業科目ごとのシラバス原稿の回収、特に非常勤、集中講義に関するものの回収、原稿校正などの編集に手間取ること、書式の統一。
- ・原稿を取りまとめた教官の負担が大きい。作成のための経費が少ない。非常勤講師の原稿が確保しにくい。

- ・各教官との連絡調整(教官室が2つのキャンパスにまたがっているため)。
- ・原稿作成(様式)及び原稿取りまとめ。
- ・編集方法(科目順とするか、カリキュラム順とするか、開講年次順とするか等)を決定する際。
- ・平成6年度から作成したが、記入例の作成に苦慮した。
- ・平成7年度より作成したが初年度であったため原稿作成等に時間がかかった。
- ・作成初年度のため、掲載内容、全体構成の決定に時間を要した。原稿提出の遅れによる編集作業の停滞。
- ・初回作成のため原稿追加が、3校時点までであった。校正のたびに内容の訂正があった。
- ・平成7年度に初めて作成したためシラバスの掲載内容等の検討に時間を費やした。
- ・作成初回であったため様式決定から製本に至まで多少混乱がありスムーズに進まなかった。
- ・授業概要である「開講科目」と並行してシラバスを作成する方式を採ったため、「開講科目」とは別にシラバスを作成することに関して教官、事務官の理解を得ること。
- ・フォーマットの調整に苦労した。
- ・様式(フォーマット)等種々決定までに時間がかかった。
- ・シラバスを作成する教官にフォーマット、項目等についての統一周知に苦労した。
- ・書式の統一作業。
- ・フォーマットの統一。
- ・様式統一。
- ・書式の統一性・記載内容の範囲。
- ・型式の決定。

- ・原稿の書式の統一化。
- ・それぞれ授業形態が異なるため、様式及び項目の統一化。
- ・教官への原稿締切の徹底、担当教官の変更への対応等。
- ・締切前の教官からの原稿収集。特に年間の講義予定の作成がスケジュール調整等のため、かなり手間取る。
- ・原稿の収集、掲載順の配列。
- ・原稿の締め切り日までに全部そろわない。
- ・原稿集め、原稿がなかなかそろわない。
- ・教官からの提出が遅い。
- ・各教官から期日までにシラバスの原稿が届かない。
- ・シラバスの原稿が提出期限までに集まらない。
- ・原稿の提出が遅れる。
- ・シラバス原稿の締め切。
- ・原稿がなかなか集まらない。
- ・すべての原稿が予定どおりに集まらなかったこと。
- ・締め切をすぎても原稿が集まらない。
- ・原稿がなかなか揃わない(非常勤等)。
- ・原稿が日程通り集まらない。
- ・原稿が集まりにくい。
- ・一部の教官からの原稿提出が遅れたこと。

- ・ 締切までの原稿の集まり。
- ・ 原稿の締切日までにすべての原稿が集まらない。校正段階に入っても原稿の差し替え等が頻繁に起こり納入スケジュールが遅れる。様式の中の各項目について未記入又は簡略過ぎる原稿の調整。
- ・ 初めて作成したため原稿依頼と回収。
- ・ 原稿集めと校正。
- ・ 原稿の取りまとめ及び校正。
- ・ 原稿の校正、編集作業。
- ・ 編集の事務作業。
- ・ 校正等事務量が大幅に増加した。
- ・ 校正に時間を要する。
- ・ 原稿の取りまとめ、校正のやりとりの工夫。
- ・ 限られた予算のなかで作成するため、写真植字で印刷することとなり全体のレイアウトをすべて大学側で整えざるを得なかったこと。
- ・ 経費節約のためオフセット印刷としたが、原稿をワープロに打ち込む作業に時間がかかり大変である。
- ・ 各教官からフロッピーで提出されるデータの入力方法が多様なため事務局で使用している機種にデータを変換できない場合があること。
- ・ 原稿を教官毎にフロッピーディスクで提出させたため多様な機種で入力されており、それをテキストファイルに変換する作業に苦労した。
- ・ 原稿を数枚のフロッピーディスクに分けて担当教官が入力するので、それを一つにまとめる作業。
- ・ 教官により使用しているワープロが異なるため提出された原稿を一つのワープロのフォーマットに変換しなければならない点。

- ・手書き原稿のワープロ打ち。
- ・原稿をワープロ浄書にて提出を依頼しているが手書きにて提出されたのが多く文字の読み難いので校正が大変であった。
- ・原稿をワープロに打ち込む作業に時間がかかり大変である。
- ・教官からのシラバスの提出は、研究室の端末機から直接電子メールにより提出することとしたが、電子メールを使用できない教官が多数いたことにより、シラバスの取りまとめが遅れたため、全体のスケジュールが遅れた。
- ・原稿をワープロ浄書で提出願うこととし、異なるワープロ・パソコン機種に対応するため六種類のアプリケーションを準備したこと。
- ・シラバスの原稿をFDによる提出を求めたため、多数の機種、種別からの変換編集作業に多大の苦労を要した。
- ・原稿作成時において各教官がワープロ印刷で書式を統一すること。
- ・授業科目、担当教官によって記載事項に盛り込まれている情報量が異なり限られた紙幅の範囲でどこまで情報提供するかについての理解を得る点。
- ・版下作成までを学部で作成するのはパソコンや道具がなく一部の教官の過剰負担となった。
- ・内容の決定と原稿収集。
- ・開講科目数が非情に多く(教員養成系学部として教員免許状取得用の科目が多数ある)量、項目の制限があった。印刷原稿を事務部で完全原稿として作成しなければならなかったため(予算の関係上)多大の労力と時間を要した。
- ・講義内容の重複をさけるための調整。
- ・わかり易い内容のマニュアルについて、各方面の大学に照会し決定するのに苦労した。
- ・シラバス作成様式の学部内合意について(自己評価委員会が提出した原案が教務厚生委員会で否決、差し戻され、再提案した。)
- ・シラバスの内容、様式等をどのようにするか苦慮した。

- ・ コンピュータでの項目登録・編集等のプログラム作成。
- ・ 学科間・学科目間の統一をはかるのに苦心した。
- ・ 原稿が締め切り日までに全て集まらない。書式条件の守られていない原稿がある。原稿のページ割りつけが困難である。
- ・ 提出された原稿を学科、科目郡ごとに並び替える作業に時間を要した。原稿の校正に時間を要したのででき上がりまでの時間調整に苦慮した。
- ・ 短期間で大量の原稿の取りまとめを行う点。
- ・ 限定期限内での原稿依頼・とりまとめ、校正及びその全体の調整(特に外国人教官に対して)。
- ・ 全学の学生対象として作成しているため、授業担当教官の数が多く原稿の取りまとめ、校正に苦勞が多い。
- ・ 記載する範囲。
- ・ シラバスの記載内容を決定するのに苦勞した。
- ・ 様式及び記載要領の徹底。
- ・ 原稿の提出 校正。
- ・ 原稿提出依頼及び校正。
- ・ 原稿回収から校正、印刷、納品に日数がない。
- ・ 各学科ごとの分冊を作ったり、原稿のメ切がぎりぎりになったりして校正なしでふみきらねばならなかったこと。
- ・ シラバスの内容(項目)について。
- ・ 原稿の回収、ワープロ入力。
- ・ 各授業担当教官に対する執筆依頼と原稿の回収。

- ・原稿の集約に困難を極めた。(フォーマットを一新したため)
- ・原稿の取りまとめ及び、印刷校正の時期が学年末で入試業務ならびに定期試験等と重なっているため、非常に多忙である。
- ・教官からの原稿提出の遅れ。作成時期が入学試験及び学年末行事等の行事と重なり時間的余裕がなかった。
- ・カリキュラムの改正時期と重なったため、原稿作成が進まずなかなか原稿が集まらなかったこと等。
- ・一部の教官は英語で授業を行っており、シラバスも英語表記をする必要があること。
- ・作成にかかわる教官(授業を担当する教官)が全学にわたっているため、取りまとめが困難である。教官側からは授業計画等についていかに詳細を掲載するか苦勞を伴う。
- ・編集及び校正作業。学生への情報伝達の一手段として、的確に情報提供を行うための工夫。
- ・他の資料(手引・時間割等)とのチェック。完全原稿の提出のため原稿作成。配布時期等のかねあいで関係スケジュールの調整。
- ・どうしても、登録できない科目(担当者の決定が遅れる等)が残る。
- ・印刷発注のための〆切期限に、新規採用教官が確定してない場合。シラバスに各授業科目毎に、開講曜日時限を明記しているが、時間割作成に時間がかかるため原稿の〆切期日までに完成させるのに苦勞する・ワープロ入力を様式化して各教官に依頼しているが手書きで提出されるため事務で入力することになる。
- ・医学科専門教育科目において、各授業時間単位で授業内容を掲載していることから、授業科目担当者及び関係授業科目間の日程等の調整に苦慮している。
- ・全教官に統一した様式で作成をお願いすること オンライン参照用のフォーマットを作成すること。
- ・全学的な統一をとるための細部の調整、学内LANに掲載するための書式との整合性。
- ・本年度は学部シラバスと全学共通のシラバスの二種類のシラバスの作成が必要である点。

- ・担当教官からの原稿の出が悪かったため時間的余裕がなくでてきた原稿をそのままダイレクト印刷をし表紙をなくしフラットファイルにそのまま綴じる方法をとった。そのため製本したものと比べ見た目が悪いうえ様式は統一されているものの各教官ごとに微妙な違いがあり少し見づらい面がある。また追加があった場合差し込める利点もあるが逆に差し込む作業がたいへんである。
- ・本学では作成するにあたり、学部教務委員会で既存の「授業科目の概要」の内容を充実させる方向で検討を重ね、平成7年度から実施に移した。この間、一部担当教官の理解と協力を得るのに苦慮し、実施までに長時間を要した。
- ・授業計画の各回の授業内容の説明で授業科目により、又授業形態により説明が難しい科目があった。
- ・授業内容及び形式が各科目とも異なる為、記述形式をどの程度統一するかが当該点であった。
- ・科目、講座間で内容、量の統一がとれないこと、基準作りが必用と思われる。
- ・シラバス作成の決定そのもの。シラバス様式の設定の決定。前期の授業はともかく、後期の授業内容の細目が作成時には明示できないことが多々ある(文系の学問の特性かもしれない)。手原稿の場合、読み取りがむずかしい場合がある。学外非常勤講師への依頼の取りまとめの煩雑さ。授業科目の配列の順序。
- ・一つの授業科目と複数の講座等の教官が担当している場合の原稿作成、校正等。
- ・複数教官で担当する科目での依頼。他学科へ依頼した科目のまとめ。
- ・作成時期を実際の開講時期よりかなり早くせざるを得ないため、演習科目(特に大学院演習)に代表されるように実際に受講する学生の関心や素養に応じて授業計画を臨機応変に組み立てていくことが望ましい科目の場合、有益な情報を提供できるシラバスを作成すること自体大変な苦勞をとらなう。
- ・開講時期の遅い科目(12月ー2月)について早い時期に授業計画を立ててもらおうこと。
- ・授業日程の変更が原稿段階から、印刷段階までの間に頻繁にあり、その度に修正を加えなければならないこと。
- ・大学ができて新しいので、実際の講義の進め方について予想が難しい段階で、シラバスを作成する点。なお現在も講義内容を見直し中である。

問5 (8) シラバス作成の評価について

(ア) 作成して良かったと思われる点 (具体的にご教示下さい。)

- ・ 作成して一年目であるため評価できません。
- ・ 平成8年度から配布のため評価できない。
- ・ シラバス作成が初回であり評価については現在不明である。
- ・ 平成7年度から作成したため詳細は不明。
- ・ 平成8年度に初めて発行するので、平成9年度以降に評価する予定。
- ・ 平成7年度に作成したばかりで評価はまだわからない。
- ・ 第一回目のシラバス作成であり、その効果についての分析、評価を行うまでに至っていない。
- ・ 過渡期のため、又大学院のため、その効果の評価が具体的に現れていない。
- ・ 講義内容が明確になり、学生教官相互の誤解がなくなった。
- ・ 学生の科目選択、学習準備に役立っている。教官の講義内容の調整、カリキュラムの全体像把握に役立っている。
- ・ 全学教育科目については授業科目が多いので、履修科目の決定に際して必用である。
- ・ 学生が授業の概要・内容等について理解することができ予習等の目安にもなる、特に選択科目の履修については、学生にとって判断材料になる。
- ・ 学生の授業に対する目標が見えて予習及び復習することが可能になり大変プラスになるとの声が大である。
- ・ 教官にとって他の科目の授業内容が詳細にわかり自分の授業の構成に参考のなった。学生にとって予習、参考書選択の参考となっている。
- ・ 学生の授業科目の選択に際し有益であった。

- ・授業計画が立て易くなった。授業計画に沿って講義を進めるために講義内容が簡潔になる。授業方法、内容の改善がはかられた。
- ・学生が授業の内容等について理解することができることと、選択科目の履修についても判断材料となる。
- ・事務担当者も授業の内容等がある程度わかり学生等の対応がスムーズになった点。
- ・学生にとって受講するかどうかの判断に役立つ。
- ・講義内容、時間帯等を事前に周知できること。
- ・授業内容の相互調整（教官の間）に有用であった。
- ・授業が計画的に行われるようになった。授業内容が把握でき、学生の科目選択、学習準備が充分行えるようになった。教官個々の意識改革に一石を投げ教育活動について厳しさが求められるようになった。
- ・学生の科目選択のための情報提供に役立っているようである ・学外者に対する教育内容の情報提供という観点からも十分な資料である。（調査中のため評価もまだできないが）
- ・学生がカリキュラムの展開の情報を事前に知ることにより効率的な学習ができ、理解を深めることができる。
- ・授業に関して殆どの事柄が記載されているので、学生の質問が減ったことと、出来あがったシラバスがどのように使われるか、作った事がどのような意味をもつのかなども重要ですが、作り終えたことの充実感が心地よかった。
- ・教育目標が示された。各授業間の授業内容の重複等について確認できる。学生が授業内容について理解しやすい。
- ・個々の授業に対する学生の動機づけが明瞭化し、学習意欲を高めている。
- ・各教官の授業を一覧できる資料が一応できたこと、将来のカリキュラム改善に必ず役立つ。
- ・学生の授業科目履修に際して、授業方法等が明示されているので大いに利用されている。
- ・アンケート調査中。

- ・整理した形で多くの情報を学生に提供できた。教官は授業計画の立案と実践に対する意識が高まった。
- ・学生に対し科目選択や学習準備のための情報を提供できたこと。学部としての授業への取り組み方に統一性が得られるようになったこと。
- ・教官、学生が授業内容について共通の理解をもてた。
- ・今まで教官と学生の間だけの情報提供であった「講義概要」に比べ、学外の人に見せて本学部の教育内容を理解してもらうためにも使いやすくなった。
- ・目的、内容、カリキュラム等を事前に学生に周知させることができる。
- ・講座間の授業内容の調整が可能となる。
- ・学部授業が全体で把握できるようになった点。
- ・授業の詳細な内容を把握できるので、学生の授業科目履修の参考になり大いに役立った。なお、授業評価の参考資料としても使用している。
- ・他の教官の授業内容が分かり、調整が可能となった。また選択科目の内容から学生の科目選択が容易になった。
- ・履修科目の選択の資料として活用されている。履修上の相談資料、授業科目内の授業内容の統一性を保つための基準としての利用。
- ・(4)に記した目的がある程度達成されたこと。
(注) (4)シラバス作成の目的について 学生の科目選択のための情報提供 学生の学習準備のための情報提供 教官の授業内容の調整。
- ・授業内容に関係した照会に迅速に対応できること。
- ・学部(専門教育)との相互理解に有用と思われる。シラバスに対する教官の否定的意見が少なくなった。
- ・他教科の授業内容が判り易くなり、重複をさけることができる。
- ・学生に対し、学習内容についての情報提供ができたこと。

- ・良かった。(学生が事前に準備できる)
- ・学生が授業のおおよその内容や期待される効果、成績評価の方法を知った上で履修計画を立てることができた。教官にとっては、自らの授業の指導案作りを行い、教育責任を明確にできた。
- ・学生の科目選択及び学習準備に役立っている。
- ・教官同士では、他教官の講義内容が把握でき、講義の位置づけ、内容の構成等に十分な配慮ができるようになったこと。また学生にとっては講義の概要、目的等をつかめることや、講義のなかで特に重要な点を認識できるようになったこと。
- ・学生が授業科目を選択する際の情報提供、参考資料として役に立っている。教官にとっては授業内容の調整をはかるための資料として、あるいは授業内容を総括し次年度の計画を立てる上で役立っている。
- ・学生が受講科目を選択するための重要な情報が提供できる。教官の計画的な授業の実施の手助けとなる。
- ・学生にとって講義内容明確となり、履修の選択に都合がよくなった。
- ・学生にとって、事前に授業内容を調べることができる。
- ・学生への履修指針ができたこと。教科の重複部分に対応しうること。
- ・授業ではどういうことをやり、学生はどのような姿勢で授業に臨むべきかということに対する目安を与えるものとして利用できる。
- ・通常他の教員の授業内容を詳しく知ることはないが、シラバスにより授業内容の調整をしたりカリキュラムの調整をしたりすることが容易となった。
- ・学生が全体の授業の流れを前もって把握できる。第三者にも、何がいかなる視点から教授されているかが明確となる。
- ・教官の授業内容の調整の参考になった。冷やかし的な受講が減った。あるていど目的意識のある学生が受講するような傾向がみられる。
- ・教員同士互いの授業が分かる。学生が選択、準備等の勉学にとりくむ際の参考として有用 (cf 問(7))

- ・とにかく作成し続けてきていること。(三年目になるし徐々に改善しつつある)
- ・教官各自による授業内容の点検、科目間の授業内容の調整が積極的に進められるようになり学類全体としての授業の体系化の意識の高揚その作業が促進された。カリキュラム検討に具体的な資料として活用できるようになった。学生の授業への取組みに積極性が感じられるようになった。
- ・カリキュラムおよび授業内容の検討に役立った。
- ・学生、教官に対する情報が増えたこと。
- ・授業内容の自主調整ができた。学生が受講に際してコースの概要をよく理解し、授業の修得を計画的に行うようになった。
- ・教官の間で授業内容が判りあえること。
- ・教官が相互に各自の授業科目を調整することが出来る。
- ・学生及び教官に対して、一般学習目標(GIO)の周知等。
- ・科目間の内容の調整。学生の科目に対する情報提供。教官の授業に対する姿勢。
- ・学生の受講選択に係る資料として有効である。授業内容の公開性を高めるうえでも意義があると思われる。
- ・新入生に教育学部の授業科目の特殊性を印刷シラバスにより少しでも早い時期に会得できるようになった。他の教官による授業内容がわかるようになった。
- ・個々の授業内容が明らかとなり、教官同士の授業内容の調整、カリキュラム検討のための資料として役立っている。
- ・一年次生については履修計画の立案に参考になっていると思われる。
- ・学生は授業に関する情報が事前に知らされるので、授業計画が立てやすい。学生の科目選択の情報提供資料になっている。(特に履修届けを提出する4月と10月にシラバスの検索件数が非常に多い)。授業が計画的に実施される。授業内容の重複が避けられる。学生の自主的学習に役立つ。データベース化により経費(印刷費 用紙代)の節減ができる。

- ・ 授業内容の調整上役立った。インターネット利用コミュニティが広がった。
- ・ 他の関連ある教員の具体的教授方法がわかった。
- ・ 選択科目の選定において役立っている。事前に講義内容の概略を学生に伝える点。
- ・ 教官：授業内容の整理と調整。
学生：授業内容の把握と予、復習、準備。
- ・ (9)参照して下さい。 注 (9) ア) 学生の受け止め方：科目選択がしやすくなった
授業内容がよくわかり勉強しやすくなった。
イ) 教官の受け止め方：授業の重複を避けることが可能になった。
- ・ 教員相互に異分野の授業内容を知ることができた。
- ・ 教官同士がどのような授業を行っているかを確認し調整することができる。
- ・ 教官の授業内容の調整及びカリキュラムの具体的検討のための資料となる。
- ・ 従来のものに比し、内容が種々の点で充実したこと。
- ・ 授業の内容が詳細に各回ごとに判る点。
- ・ 授業履修前に予め学生への情報伝達が可能となった。
- ・ 科目選択の情報提供に効果があった。教育コース選択の情報提供に効果があった。
- ・ 教官サイド：他の教官の講義内容、類似科目等を把握できると共に相互性が図れる。
学生サイド：履修内容やポイントが明確になり学習効果が大きくなる。
- ・ 履修計画の立案に際し、大変役立つ。
- ・ 学生の科目選択・学習準備等に有効と思われる。
- ・ (8) (9)については今後調査予定。

- ・履修科目の選択に役立っている。特に他の課程の授業科目を履修する際に役立っていると思われる。
- ・学生の授業に対する理解及び履修計画に役立った。
- ・学生が事前に授業内容を知り授業計画を立てやすくなった。教官が他の教官の授業内容を詳しく知ることができる。
- ・学生の体系的積み上げ科目の履修が可能となった。
- ・選択科目について：授業科目の選択に役立つ。
必修科目について：授業の内容と流れがわかるので準備等が容易。
- ・(4)の1の目的を達していると思われる。(注)学生の科目選択のための情報提供。
- ・学生の科目選択のための情報提供として有効に機能。
- ・他学科の授業方法が分かり大変参考になった。
- ・授業の概要がより詳しくわかるようになった。
- ・講義内容の明確化。学生の履修上の便益。
- ・授業内容等がわかる、学生への情報提供。
- ・授業の内容が事前にわかり有意義である。
- ・学生が各講義内容の概観を把握し、学習準備のためにも利用できるようになった。
- ・学生に対するサービスの向上。
- ・学生の修学上、教科の内容を事前に把握することができ非常に参考になる。大学自身としては、各課程、専攻の体系的な教育を施すことを明確化することができ有意義である。教官同志で内容のチェックが可能である。
- ・学生の履修計画に役立った。
- ・学生の科目選択がスムーズになった。

- ・ 学生が科目を選択するための情報をあらかじめ提供できる。教官の授業内容の調整の資料にすることができる。
- ・ 学生の科目選択及び学習準備等の情報提供等に役立ったと思われる。学生による授業評価及び教官の授業内容の調整等に役立ったと思われる。図書館の学生用図書購入のための資料収集等に役立ったと思われる。
- ・ 各自履修計画及び選択科目等の授業計画に必用である。
- ・ 学生の科目の履修方法が適確に行われている。
- ・ 大学の授業システムの全体が把握でき受講計画の立案に役立っている。
- ・ 全教官の授業内容がオープンになり教官相互、学生のためにも益するところが大きい。
- ・ 授業の内容が把握できる。
- ・ 一応、学生への情報提供の資料となったこと。大学外からの科目の照会に対し、回答用の資料となったこと。
- ・ 学生が行う「受講登録」の祭、何を受講するか参考になること(選択の場合)。授業の概要がわかることにより、学生の学習準備がしやすくなったこと。
- ・ ガイダンス等での重要な参考資料となっている。講義概要を学内に広く周知するので、一般教育についての情報提供が進展した。
- ・ 学生が事前に講義内容を検討した上で受講科目を選択できる。
- ・ 教官の講義に対する姿勢が明確に示されている。いいかげんな講義ができなくなった。
- ・ 学生の科目選択に有効。
- ・ 学生が授業を選択するのに大変役立っている。
- ・ 学部によって履修すべき科目が異なるため、受講計画を立てる際、所属学部の授業内容などを確かめることができる。
- ・ 教官各個人、講座・研究室での授業計画が、学部としての授業計画として交流しうる素材を提供できた。授業内容・方法での交流を可能とした。

- ・ 学生に対して年間授業スケジュールを把握させることにより、授業効果が上がった。
- ・ 教官の授業内容の調整、カリキュラムの検討をするのに役立った。
- ・ 各学科でカリキュラム改善を考える上で参考になる。学生は受講科目の全体像をつかみ易くなったようである。
- ・ 学生にとっては便利になったと思われる。また日本の大学では同一教科内でも同僚どうしがどのような内容の講義をしているかについての情報を交換し合う習慣がないのだが、シラバスのおかげでおたがいの授業内容をきめ細かく調整することができるようになった。
- ・ 学生が授業を選択し履修するにあたり、教官からの最初のメッセージとして、大きな役目を果たしている。学習の目的、ねらいを明確にし、教育効果を高めることができる。
 - 1・ 授業のねらい及び概要を正確に受講生に伝えることができる。
 - 2・ 授業の年間をとおしての計画が図られるため、学習への意欲を持たせることができる。
 - 3・ テキスト・参考書等、授業開始前に指示ができることにより、授業スタート前に予習ができるので、学習への導入がスムーズに行え教育効果を高める。
 - 4・ 授業計画を学生に示すことにより教官、学生ともに授業の準備がしやすくなる。
- ・ 授業の進み具合がチェックできる。
- ・ あらかじめ授業の準備ができる。
- ・ 履修計画の立案および講義内容が事前に把握できるようになった。この効果はおもに低学年である。
- ・ 教育目標がより明確となった。
- ・ 学生が授業を選択する時の指針となる。
- ・ 多数の選択科目の中から学生が自分の関心のあるテーマについての科目を選ぶことが容易となった。
- ・ 並列開講授業に対する選択のための情報を客観的に呈示できること。
- ・ 学生、教職員への授業内容の提示。
- ・ 新入生が履修に際して、事前に科目内容等の情報把握ができたと思われる点等。

- ・学生(特にM1)の履修決定の主要資料となっている。
- ・研究科全体の講義体系の全体像と個々の授業の関係が把握できる。
- ・多くの科目の中から選択する場合シラバスの役割が大きい。また学習するうえでの指導書的作用を果たしている。
- ・学生に対する情報提供の量が増え、履修計画を立てる上で参考とされた。
- ・学生のみでなく、教官間で授業内容を把握することにより体系的な授業を実施できる。
- ・学生の科目選択のための情報提供に役立ったと思われる。
- ・学生及び教官とも積極的に活用している。
- ・講義毎の授業内容に関する情報量が多くなり、学生は活用しやすいと思われる。
- ・教官にとっては、授業の目的・内容・方法等の再点検につながり、教育方法の見直しができる。また、具体的な指針が示されていることから、学生にとって自己学習を進める上で、かなり役立っている。
- ・学生に段階的履修の考え方を具体的に伝えることができる。授業科目選択の指針となっている。
- ・授業が計画的に行うことができる。学生の側で学習準備ができる。その為、授業が充実した。
- ・近縁の授業科目の内容の調整を具体的に且つ容易に行えるようになった。さらに内容の検討から科目の統合などを具体化できる準備が整った。
- ・従来の学内用のみならず、インターネットを通じ公開することにより教官が授業内容を吟味し、それを実施する意識を高めることができた。
- ・教官相互の授業内容が分かり、内容の調整が可能となった。学生があらかじめ講義内容を知り、科目選択が適切に行えるようになった。
- ・授業の展開が学生及び教官に周知されるため相方にとって有意義であった。

・教官サイドからは、他の教官の授業内容が明確に把握できるため、自己の授業との関連付けが容易にできるという面で、また、学生サイドからは、特に選択科目の内容が詳細に判るため履修計画を立てやすいという面で、双方ともに非常に有効であった。

・従来のものに比べ見やすくなった事や教官からのメッセージが加わった事で学生側により多くの情報が与えられ、科目選択の上で有効な資料となった点等学生から好評を得ている。

・授業内容がよく分かり学生の授業科目決定に大いに役立った。

・授業計画を文書で示すことは送り手(教官サイド)側にとっても講義の整理という面で有益であった。

・授業内容に必用とされる準備・努力投入が前もってわかるので授業の選択がしやすい。

・専門科目の授業の流れや他の科目との関連が把握できる。

・学生が準備してくるので授業が進めやすかった。

・他の教官の授業内容が一目でわかる。学生が予め教科書を購入して出席する。

・独立研究科であるため研究科以外の教官・学生にも授業内容がわかる 受験生にとっても有用である。

・選択の幅が広がったこと及び授業内容に関心を持った 授業が活発的なものとなった。

・平成8年度以降は、各授業の内容要旨について掲載内容を充実させた「講義概要(シラバス)」として発行予定であるが、平成7年度までは、「授業科目履修案内」として履修細目、科目表、学則等諸規程、各授業内容要旨等を併せて掲載し発行している。このため必要不可欠の冊子であり、特に評価、意見の聴取は行っていない。

・学生の履修に役立っている。事務として教官の担当教科、研究内容がわかり部外者との対応に役立っている。

・学生の科目選択に役立っている。

・学生の科目選択、学習準備が容易になったこと。教官の授業内容の調整が容易になったこと。学部の授業内容を社会に公表できたこと。

- ・学生に授業のイメージを事前に具体的に伝えることができる。中途での学生の脱落が少ない。
- ・参考文献等の提示で予習ができており授業目的が達成されやすい。
- ・学生が履修するにあたって、その授業の目標や具体的な内容、授業の流れ評価方法、学習のために役立つ参考資料等に関し、その概要や予定を事前に知り自らの履修計画や日々の学習に役立てることによって教育効果を向上させることができる。
- ・各授業の計画が明らかにされたことにより学科全体としての授業体系が有機的にしっかりしたものになった。対象とする学生がはっきり指定できること。受講のための条件がはっきり指定できること。教科書、参考書があらかじめ指定できるので、第一回目の講義までに用意させることができる。学生に役立ったと感謝された。各授業の内容構成を改めて整理することによってカリキュラム編成上の教育系列を議論するのに役立てることができる。
- ・年間授業計画を学生に事前に示すことにより学生の学習効率を上げるのに役立った。
- ・実際に履修しようとする科目への指針ができた。履修届けを早く締め切ることができる。
- ・授業科目全般についてよくわかる。
- ・具体的な点について、今後考察する必要がある。
- ・学生が詳細な情報を得ることができること。履修指導のうえで参考になること。
- ・学生が履修しようとする科目について事前に情報の提供が可能となり、四年間を通して効率よく体系的な学習効果(4年一貫教育)が期待できる点。
- ・学生の授業科目選択のために役立っている。
- ・学生の履修計画、教員の授業計画に役立った。
- ・学生の授業選択に役立った。授業進行についての学生の理解を助けた。教師の事前の授業計画を促進した。教師相互間の授業内容の調整を容易にした。
- ・詳しく講義内容が紹介されているため、学生の科目選択と学習する上で役立っている。

- ・学生にとっては、授業計画、内容があらかじめ分かるので履修上また勉学意欲の向上のため非常に有益である。教官にとっても従来行っていた授業計画、内容等を文章化して学生に提示するので実際に授業を進める上で益になることが多い。
- ・他科目との進度の比較可能。他科目の授業方法が参考になる。学生にとっても学習準備に有用と考える。
- ・授業の内容等を予告することによって自主的学習の一助となっていると思う。
- ・学生にとって授業目標が明確になり、参考書などで授業準備予習がしやすくなった。
- ・学生の評判が概ね良かった。
- ・授業相互の内容が把握でき、内容の比較調整が行いやすくなり、以後授業を進めるのに参考となった。学生の履修のための情報提供に参考となった。
- ・年間授業計画とその内容が学生によく伝わった。教官の間で授業内容の調整に役立った。
- ・学生が利用している。教官の授業に対する責任意識の増大。
- ・授業科目の内容がシラバス一冊で把握できる。
- ・授業科目の内容がおたがいにわかり、内容が調整できる。
- ・学生の科目選択の参考になる。授業計画がやりやすくなる。
- ・学生に対する授業内容に関する情報量が増大した。それにより学生の授業準備に計画性をもたせることができた。
- ・学生の科目選択に際して有益な情報を提供できた。
- ・内容を再検討してよりよい内容に修正できた。
- ・学生が授業を履修する上で、事前に授業内容を知ることにより予習が十分に行える。また、教官の年間の授業計画が立てやすい。
- ・授業内容相互の必要以上に重複することの防止と教育方法等改善を多面的に検討する際の基礎資料となる。また、学生の自主的学習や理解を助ける上で役立っている。

・学部、学科における教育内容が全体としてわかり、講義内容の重複や不足項目などがわかり内容の調整がしやすくなった。学生も講義の内容を事前を知ることができ選択しやすくなった。

・学生が授業の内容を事前に把握できる。授業内容を教官同士で調整できる。

・独立研究科である本研究科は大学内の教官をよせ集めた研究科であるためまた本研究科の特徴でもあるが文系、理系をとわず教育研究をする場でもあるため教官個人々々の研究分野や専門がばらばらであるがシラバスの作成により明確になった。また別の使用方法として入学志願者がよく利用している。

・コース・カリキュラムにおける複雑な履修方法が良く学生に理解していること、教職員が学生に指導する際にも大変役に立つ。

・学生が履修計画を立てる際に大変参考になる。他学科の講義内容もわかるので学生だけでなく教官にとっても有用。

・学生の学習計画に役立てられつつある。講座間の授業内容の調整に有効である。

・授業計画が明示され、教科書も指定してあるので学生の授業の対応がスムーズにいくこと。

・学生の科目選択のための情報提供として役立っている。教官が相互に授業内容を理解し合うことができる。教官が 授業内容を調整することができる。

・学生が計画的に学習できる。

・個々の授業科目について、その概要、目的及び教科書、参考文献等の予備知識を与えることができた。国家試験の改変などに伴うカリキュラムの改定に有益であった。

・関連する授業科目の内容が明示され、授業計画が容易となった。学生へのガイダンス、オリエンテーションに際して有効に活用できる。

・学生にとって総合的な履修計画が適切に、効果的に立てることが可能となり、教官にとっても年間の授業計画を早期に立案でき、より充実した内容を教授して教育効果をあげることが可能となった。

・学生が授業科目を選択するのに役立った。

- ・各教官の講義概要がよく分かる。
- ・カリキュラム全体の見通しに役立つ。
- ・学生が、学習内容の全体像を把握できる。各科目の関連性、学習進度を知り予習、復習を容易にする。自主学習の計画が立てやすい。
- ・教官が、情報交換や協力がしやすい。内容の欠落、重複をふせげる。全体のレベルの把握ができる。
- ・教官各位の授業の内容がよく判る。
- ・学生の授業科目の選択と学習準備に活用される。
- ・授業内容を整理し全体として教育効果をより高めることができた。カリキュラム編成に不備がないか検討できた。
- ・カリキュラム検討、授業内容の調整、大学改革のための資料として一冊にまとまっているので役に立っている。
- ・教官相互間における授業内容の調整がスムーズに行われた。
- ・授業内容における重複等の防止。
- ・学生の科目選択と学習準備のための情報提供ができる点。
- ・授業の全体像が前もって理解できる。
- ・開講科目の内容が一括してわかる。
- ・学生がカリキュラムを組む上でかなり参考になっている点。学生と教官との連絡がとりよくなった点。
- ・学生の勉学意欲の向上。学生に対する履修指導の徹底。授業科目の重複部分、欠落部分が解消し、授業内容の明確化、重点化、効率化が図られ授業の活性化に連動。教官相互の授業内容の連帯強化。
- ・学生への情報提供はもとより、学外一般に授業内容等の情報提供出来た。
- ・学生に授業科目についての詳細な情報を提供できた。

- ・学生の科目選択のための資料として大いに役立つように思う。また教官各自が自らの担当科目の授業のあり方について定期的に見直しをするよい機会ができたと思う。
- ・事前に講義内容を周知しているので講義準備を計画的に進めることができる。
- ・学部全体の授業内容が把握できる。
- ・学生が事前に各教科の授業内容を確認できる。各講座間で授業内容が把握でき、内容の調整が可能となる。
- ・授業計画表は以前から作成していたが、今回は特に3コース制にしたための学生へのカリキュラム。ガイダンスに大いに役立つ。
- ・講義の内容が学生にみえる。
- ・その研究科（学部）の授業関係の全体像をとらえることができる。
- ・研究科全体の授業内容が把握できる。科目による授業内容の重複が避けられる。
- ・授業内容がより明確となり、学生の履修計画に有益である。また学外の社会人である科目等履修生希望者が授業を選択するに当たりより具体的な情報が得られる。
- ・学生個人への修学上の参考、教育情報の提供という面で良かったと思う。
- ・科目名をみただけでは内容がわからないがシラバスを作成することで概要が理解できる。
- ・選択科目の履修に当たっての参考となる点。事務用の資料(学外からの問い合わせ、科目等履修生等)として参考となる点。
- ・教官相互の授業内容が確認され、関連科目の紹介ができる点。
- ・教官が講義のあり方について再考するよい機会となった。
- ・学生の授業に対する受け身の姿勢から能動への変化。4年間にわたる履修計画作成をサポート 予習復習の際の効率化。参考図書に掲載による授業理解の深化。
- ・本学は機能別、系統別カリキュラムを採用しており、シラバスはこのカリキュラムを履修する指針として、必要不可欠である。

- ・学生に授業の目標や内容を具体的に提示することができた。
- ・学生が履修科目の選択に荷役立っている。教官側で授業内容を検討し、また計画通り進むように努力する。
- ・予習の参考となり受講や実習の準備のためには必要。
- ・授業の流れがわかるようになった。
- ・計画的に教育が行える。
- ・シラバスにより授業内容が判りやすくなった。
- ・教員がより自覚的に授業計画を組み立てるようになった点。授業の性格規定、科目間の関連等についても自覚的に確認されるようになった点。
- ・学生の授業に対する心がまえが向上した。カリキュラム、ガイダンスへの利用。各教官の講義内容や授業の進め方がよく理解できた。
- ・授業の目標及び内容等を具体的に示すことにより、学生が自主的に当該授業を選択する際にある程度の情報を提供しているものと思われる。
- ・学生にとっては授業の初めに講義内容や学習の目標を知ることができる。教官の間では講義内容の重複や不足部分を調整し合うことができる。
- ・授業の目標が教官、学生双方に明確になったこと。一連の教育の流れを把握することができること。
- ・学生の学習準備に役立っている。教官が他の教官の講義内容を知ることにより、授業内容の調整ができた。
- ・学生の科目選択及び学習準備のための情報提供や教官の授業内容の調整。
- ・学生の科目選択のための情報提供として大変効果があった。教官が他の教官の授業内容を知ることができた。
- ・授業の目的、ねらい、テキスト、評価等が明確に表示されたため、より正確な情報を提供できるようになった。

・教官が意識して各自の授業科目の内容を整理し授業を推し進めることができるようになった。また学生にとっても授業に関する情報が提供され、目的をもって授業に参加できるようになった。

・事前に学生に履修に関する情報を提供でき、各授業のガイダンスが軽減された。

・各科目毎に教育目的、内容、方法を細かに記載しているので、選択科目の決定等学生の学習に役立っている。

・学生に対して事前に授業内容や受講に当たって知っておくべきことを予告でき、受講についての学生の理解を助けることができる。各教官が関連の授業内容を知ることにより、重複、欠落等授業の改善を図ることができる。

・早く情報を提供することによって、講義内容が適格に把握できていると思われる。

・授業の目標・概要及び授業計画が事前に示されるので学生にとっては予習及び事前学習に役立つと思われること。教官にとっては関連授業内容等を知ることにより、重複及び欠落等を知ることができ教育の向上が図れること。

・学生が予め授業内容、計画等を知ることができ準備及び理解が容易になること。上記の予知により教官にとっても授業効果が高められると期待できること。教育内容の全体の流れと授業の体系や特長を予め理解することにより授業科目の選択。が容易になると思われること。教官層も関連の授業内容等を知ることができ授業の改善に役立つ。

・授業内容の情報開示によって学生の一年間の学習計画が立てやすくなったこと。教官の授業内容の調整が可能になったこと。学部のカリキュラムの調整、検討がしやすくなったこと。

・教官側にとっては、講義内容をお互いに知ることができ、場合によってはその情報を自分の講義。内容に反映することもできるようになった。

学生側にとっては、講義内容を前もって知ることができるので、履修計画を十分に検討できるようになった。

・あらかじめ授業内容が把握できるので予習可能、又、選択する精度が高まったこと。

・学部全体の授業内容を具体的に把握できる。

・今後、シラバス作成の目的(上記(4))に多大の刺激を与えることが期待される。

注 (4) 学生の学習準備のための情報提供 カリキュラム検討のための資料
教官の授業内容の調整 その他大学改革のための資料

・従来にくらべ授業内容等の情報がより詳細になった。

・授業科目の内容がはっきり把握出来るので、色々な事柄に利用出来るようになった。

・教官間における授業内容の検討に役立った。学生の科目選択に役立った。

・授業の概要を学生に対して十分に周知することができた。

・教官達には自らの目標となり、各々が努力しているようである。教官と学生間の契約であって、効果的に利用されていると思われる。

・学生の学習準備のための情報提供に役立っている。

・学生が履修計画を容易に立てられる。

・授業内容で重複している点が調整できた。非常勤講師による分担授業回数が減った。

・学生がシステマティックに授業内容を把握できるようになった。(すなわち、従来の講義では一つの授業中の内容が全体像との関連なしに単に知識を増やす役割しか果たせなかった。)

・学生が授業計画にしたがって計画的に行動できるようになった。大学の学部学科の内容がよくわかると部外者より好評・

・学生の授業科目選択に大いに役立っている。入学希望者が本学を選ぶ参考になっている。

・講義内容の重複をさけることができる。学生に講義全体としての目的を知らせることができた。学外に対して本研究科の教育方針を示す材料となった。

・他の講義の講義内容を見て、調整が可能になる。学生に、講義全体の概観を示すことができる。

・学生の講義履修選択のガイドとなった。

問5 (8) シラバス作成の評価について

(イ) 作成した結果マイナスと思われる点 (具体的にご教示下さい。)

- ・作成して1年目なので、まだ具体的な評価はできない。
- ・平成8年度から配布のため評価できない。
- ・シラバス作成が初回であり評価については現在不明である。
- ・平成7年度に作成したばかりで評価はまだわからない。
- ・A4版で1授業科目1頁としたが厚さが1.7cmとなってしまう、持ち運ぶには不便となった。授業科目によっては内容が少なく空白が多いものがあり無駄であった。次回は1頁に2授業科目を載せるなどの工夫をしたい。
- ・授業の進行を制限する。途中の変更が困難である。単元の進行と時間割の不一致をもたらす。
- ・内容の記述に文字数が制限されるので説明不足となり誤解を生じないかとの心配はある。
- ・経費がかかること。担当教官が計画、資料集め、シラバス(指針)の編集等に時間が多くとられること。
- ・作成に多くの経費及び労力が必要である。
- ・シラバスどおりの授業をしないとどうなるかといった不安や個人評価の材料にされそうといった危惧が一部に出てきたこと、印刷費が莫大であること。
- ・アンケート調査中。
- ・従来より大部になったため取り扱いが多少不便になった程度で特にない。
- ・授業によっては事前に内容を確認できるわけではない。
- ・費用がかかるわりには学生が十分活用していないように思う。
- ・初年度のため学生に対する指導がいきとどかず、十分に活用できなかった面があった。
- ・授業方針や進度についての記述が大まか過ぎる点。

- ・学生の利用が学期初め(履修登録時期)に限られているきらいがある。
- ・従前の「学習・臨床実習の手引き」と「授業要項」を作成し、経費が多くかかった。
- ・作成のために経費がかかったこと。作成のために各教官が時間を必要としたこと。
- ・特にマイナス面はない・
- ・シラバスどおりには必ずしも授業が進められない場合がある。
- ・シラバスの内容と実際の授業内容が異なることがある。
- ・費用と労力。詳しく真面目にシラバスが作成された科目を学生が忌避する例が散見される。
- ・あまり詳しく予定を作ると学生と対話しつつ授業を組み立てていくという柔軟性に欠けてしまうという点(内容についてのマイナス点)。
- ・特にないが、シラバス作成経費の増大により、学類会計の負担が増大した。
- ・授業内容が硬直化するという一面がなくはない。
- ・平成7年度版は学生全員にシラバスを配布したが、2年次生以上の学生がどのような利用方法をしているか未知数である。シラバスに従うと学生にあった授業の変更しにくくなる。作成に多額の経費がかかる。
- ・セキュリティの問題が解決していない。授業内容の評価以外の評価に無断借用される恐れがある。
- ・特にないが、ページ数が増え重くなった。
- ・シラバスと異なる内容の講義をすることになったとき、学生の予期を裏切ることになるかも知れないこと。
- ・全体として各回ごとの授業内容を詳細に記載できなかつたことが今後の改善点となる。
- ・内容を充実させ、詳述したシラバスでは頁数が拡大し持ち運びに不便を感じる。
- ・全課程、全学年の授業科目を一冊に取りまとめているため分厚くなってしまっている。

- ・特になし。ただ開講科目数が多いのでページ数が多くなり検索に時間がかかる。
- ・作成に係る事務量が増大した。
- ・事務量及び印刷費の増となった。
- ・作成に当たり相当の労力が必要となる。
- ・時代の変化に即応した授業を導入しにくい。
- ・特にないが事務的負担がやや増えた。
- ・掲載する内容の文字数を指定しなかったため各ページごとの文字のポイント数が統一できなかった。
- ・経費の負担区分が明確でない。事務官に多大の労力を必要としたこと。演習等において「未定」とするものが若干あったこと。
- ・内容を変更しようとする、公表されたシラバスとの整合性を考える必要が生じる。
- ・貴重なパルプ資源が無駄に使用され、環境破壊につながっている面がある。シラバスの内容に拘束され、新たな授業展開を図れない恐れがある。
- ・授業を記載どおりに進めなければならない。(学生の理解度によりもう少し時間をかけたい場合がある)
- ・授業内容の変更がやりにくい。経費と労力が掛かりすぎる。
- ・学生の理解度、興味等に合わせて、あるいは授業科目名からして授業内容の自由度が高い部分、途中から授業内容を自由に変更しにくいこと。
- ・冊子が暑く、重いため持ち歩くことが難しい。学生が読まなくなる傾向を招きやすい怖れがある。
- ・教官及び事務官の業務量が増えた。
- ・現時点では、特にマイナス点は見当たらない。

・従来は講義要目として発行していたが、そのときには冊子の厚みは120頁程であったものがシラバスとなれば350頁にもなり持ち歩きに不便をきたす。

・毎回の授業内容が前以て知らされ、ある意味で固定化されるので時宜にかなった内容のアドリブ的変更が難しくなった。

・各学科単位等に分冊することをせず、全学科、全授業科目を一冊にまとめたため、頁数、重量が増え、携帯性に若干の難点がある。

・内容が細部にわたって記載されているため毎年の変更点などが多く作業にかなりの時間と労力を費やす。

・平成8年度以降は、各授業の内容要旨について掲載内容を充実させた「講義概要(シラバス)」として発行予定であるが、平成7年度までは「授業科目履修案内」として履修細目、科目表、学則等諸規程、各授業内容要旨等を併せて掲載し発行している。このため必要不可欠の冊子であり、特に評価、意見の聴取は行っていない。注(ア)と同じ

・授業計画等を変更するときに、多少問題が生じる。

・少人数授業の場合、授業登録した学生をみてから、授業内容を大きく変更せざるを得ない科目もある。この点、すべての科目に横並び式に同程度の形式、分量でシラバスの作成が要求されることには無理があった。

講義内容を大幅に変更するときは、シラバスから書き直す必要がある。シラバスに記載された授業内容を消化するという意識が働く恐れがあり、その結果授業全体の柔軟性が失う可能性が心配される。

・担当者によっては、原稿を書いた時期と講義の開始時期がずれるため、異なる内容の講義となる場合がある。

・具体的な点について、今後考察する必要がある。

・経費面での負担が大きい。

・教官が授業する上で(特に進行速度面で)拘束され、柔軟な対応ができにくくなる。

・授業は学生の反応を見ながら対話的に進めるケースも多いので、必ずしも計画書に書いたとおりに進まないこともある。この点は学生に説明すれば大体了承が得られるとは思われるが、一部の学生には不満が起るかもしれない。

- ・持ち運びに大きすぎた(A4版)。
- ・作成配布後に変更される場合に混乱する。
- ・半年から一年前に内容、教科書等を決めなくてはならない。非常勤講師新任教官担当のものが空欄になる。
- ・授業の柔軟性に支障がある。実際の授業にマッチしないことがある。A4版で605頁あるため持ち運びしにくい。
- ・特にないが大部になりすぎ資源を大量に必要とするようになった。
- ・持ち運びに不便。
- ・作成にかかわる者は、多大の時間と労力を費やされる。
- ・全ての面が網羅されていない点。
- ・全ての授業科目を一冊にまとめたため、約500頁と厚くなり、学生の利便性に欠けた。又作成費用がかかりすぎた。
- ・授業のフレキシビリティが失なわれるおそれがある。
- ・取りまとめがいろいろな面で煩雑であり、そのため作成に必要である時間が相当膨大である。作成に中心となってたずさわった教官にとっては研究のための時間をけずる必要に迫られた。
- ・臨機応変の措置をとりにくい。
- ・毎年学生に配布しているので一人の学生が6年間で何冊も持つようになり経費のムダが多い。
- ・あまりに早くシラバスで授業内容の詳細につき情報提供することになった結果、開講後学生のナマの反応を見ながら臨機応変に授業を組み立てていくという面ではかえって難しくなったように思う。
- ・講義計画の修正に不都合である。
- ・学部として統一したシラバスを作成すると、各学科独自の内容等が表わしにくくなる。

- ・項目や表示方法を全学的に統一されると、却って研究科の独自性を表わしにくくなる。
- ・「授業要目」との重複を解消するため一本化したいが、学生個人に配布するには携帯に不便である。
- ・冊子と成して全学生に配布するため、当該学生にとって不要の科目(他学科の科目等)も多く含まれるものと思われる。
- ・あまり詳細に内容を提示した場合、授業編成の自由度が失われる恐れがある。
- ・授業の進行が授業計画に制約されることがある。
- ・特にないが都合により教科や教室等を変更した際には連絡の徹底が必要となる。
- ・最新の話題やトピックスを入れた内容を計画する場合には記入しにくい。
- ・シラバスの狙いは何なのか教官側も学生側も十分に理解していない。アメリカの大学では、契約書的な性格をも併せ持つと言われるが日本ではそのような慣行は形成されていないし今後も形成されないだろう。一冊に合本したものは、毎回の授業の際に携帯に不便であり、したがって授業に持参する学生も少ない。個々の教官がそれぞれの授業の冒頭に授業プランを手渡す方法もある。
- ・シラバスを柔軟に使いこなすことができればさしたるデメリットはない。
- ・実際に行っている授業とシラバスの内容が異なっている授業があるのも事実でシラバスが明確に表示されている分だけ授業に対するとまどいや不満の声もある。
- ・シラバス作成の検討時点で次のような懸念、危惧が提起された。
 研究創造活動をベースにした大学での個性ある授業内容や多様な形態の喪失。
 新鮮な興味ある最先端的テーマやトピックスの導入ができなくなる。したがって、創造活動に根ざした大学教育の良さや重要性が低下していくのではないか。
- ・学部としては費用が持ち出しとなり、研究費が圧迫される。内容を充実させると費用がかさむこと。
- ・分厚くなり過ぎて、気軽な持参に不都合になっている。
- ・各回ごとの授業テーマ、内容に実施上ではズレや洩れもあり、学生から苦情がでた。

・予定(予告)通り進まない場合、当然評価が低くなる。 学期途中に於いての内容変更が困難を伴う。

・型ちにはまった講義になり、教官の研究から派生する面白い内容、教官の研究者としての話ができなくなる等、教官の個性がでない講義になってしまうきらいがある。

・計画にしばられて、学生の理解度に応じた進行がおこないにくい。

・シラバスにとらわれすぎて、その時々の特ピックス等に時間を割くことができず、講義全体の余裕が欠けてしまう。